



江戸時代の外交官 城使役

江戸時代は、藩（大名家）が支配者としての主要な組織であり、藩の中には幕府や他藩と交渉する担当者（城使役）が置かれました。

彦根藩では「城使役」と呼ばれ、定員は3〜4人程度、300石程度の中堅藩士が江戸の上屋敷にて勤めました。



▲城使役の業務日誌「御城使寄合留帳」
江戸中期から約130年分が現存しています

城使役が毎日記録した業務日誌が、現存しており、この「御城使寄合留帳」から城使役の日々の仕事内容が分かります。

幕府からは、政治の中核である老中や、大名へ法令伝達をする大目付から日々さまざまな書類が出されますが、それを受け取る担当が城使役です。急ぎの場合や簡易なものは一通を数藩の間で回覧しますが、届けられた書類はすぐに筆写して原本は次の藩へまわし、写しを上役に渡しました。重要な書類は城使役が直接老中の所まで取りに行きます。また、幕府への届け出や贈り物も持参しました。幕府の担当者や相談したり、不明な点を問い合わせるといった実務的な交渉をするのも彼らの仕事でした。

さらに、藩主が登城する日には城使役の1人が御供して江戸城まで行きました。藩主が国許に帰っている間は、登城できない藩主に代わり、少なくとも3日に1度は江戸城に行つて、將軍の御機嫌が変わりないかを聞き出して、彦根の藩主に知らせました。

また、諸大名との交渉も彼らの仕事です。一つには、幕府へ届けを出す際の書き方や手順の先例を、類似の例をもつ大名に照会しています。先例主義の当時、類似する家格の大名の先例は参考になりました。その他、時候のあいさつや祝儀の品を届ける使者をつとめました。藩主やその家族の身に何かが生じた場合に知らせるのも城使役の役割でしたが、これが膨大な数でした。帰国や参勤の日程を知らせる先は約40家、家族の縁談が決まったことは約70家に知らせています。

このように、城使役の仕事は幕府や他大名との交渉に携わるため、江戸城内の作法や先例に通じている必要があります。伝え忘れなどミスは藩の名譽にかかわるため、絶対に許されません。加えて、自藩に有利となるように交渉を進めることのできる能力も必要でした。仕事の量も非常に多く、毎日のように江戸城や大名宅に出かけたり、来客の応対をします。つまり、城使役とは、藩を代表して対外的な交渉をする「外交官」であり、有能な藩士が選ばれたことでした。

さらに、「御城使寄合留帳」には書かれていませんが、他家からこっそり情報を探し出すには、酒の席でのつきあいも大切だったようです。昼夜を問わない激務で組織に尽くすサラリーマンの姿は、江戸時代にも見られたのです。

（彦根城博物館 学芸員 野田浩子）